サステナブル

持続可能な社会の再構築とICTの応用

⑤

まんのう町立図書館の運営管理を請け負うリブネットは、将来の図書館がどうあるべきかを念頭に置いた活動を展開。地域コミュニティが疲弊する中、地域の広場機能としての役割を図書館を向けている。そのためのICT活用を積極的に進めている。（北島圭）

地域コミュニティとしての図書館

図書館の運営管理でICTをフル活用

まんのう町立図書館の運営管理を請け負うリブネットの谷口社長は「前例のないものをつくりたいと考え、既成概念にこだわらなかった。当社は、将来の図書館がどうあるべきかを念頭に置いて、図書館をつくっている」と話す。

例えば、館内のセンタテーブルは、広場機能として設置し、そこで新聞を読んでいる人もいれば、パソコンをやっている人も、場合によっては商談している人もいる。静かに本を読みたい人たちは、センタテーブルに座らずに、別の空間で本を読んでいる。

同館はハイブリッド図書館だが、電子書籍がどう進展するか見えない状況の中で、さまざまな変化に対応できるようにしている。

この点について谷口社長は「電子書籍はさらに広がっていくだろう。ただ、それは個人で読む電子書籍であり、単にコンテンツとして本を読むのであれば、図書館は必要ない。情報を提供するという意味では、図書館という箱はあまり意味がなくなる。しかし、地域のネットワーク、コミュニティが曖昧になる中で、広場機能をきちんとつくって、地域情報をきちんと維持していく必要がある。それが今後の図書館の役割であり、そのため紙の本は、図書館で用意をして、皆が読めるようにしないといけない」と述べる。

単なる情報はすでに地域を超えて流通しているが、地域コミュニティを考えると、やはりきちんとした情報拠点あるいは知の拠点が必要になる。少子高齢化が進み、地域コミュニティが疲弊する中、その役割をだれがどう果たしていくか。地域の人々が気軽に集まれる場所をどう維持していくのか。

リブネットはそういった視点で図書館づくりを進めている。

本との出会いが選択肢を広げる

谷口社長がリブネットを立ち上げたのは02年。それまでは三重県の教育委員会で学校図書館を担当していた。

「本との出会いで人生観が変わる生徒、グッと成長を見せる生徒がたくさんいた。本を読むことで、子どもたちの人生の選択肢はもっと広がると強く感じた」と当時を振り返る。

確かに、蔵書のある家庭や、図書館によく行く家庭の子どもなら本との出会いは確保される。しかし、そうでない家庭の子どもたちにとって最後の砦になるのは学校図書館しかない。

「そこを何とかしないといけないと思い立ち、自分で会社を立ち上げた」（谷口社長）。

司書を孤立させない仕組み

リブネットの強みは図書館の運営管理ノウハウにある。

学校図書館には司書がいるが、単に司書を置けばよりよい図書空間になるわけではない。

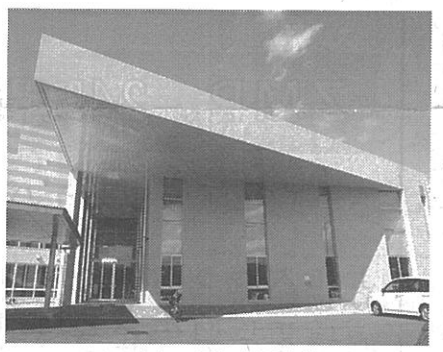
「教育の中枢に関わる図書館の運営を司書1人に任せるわけにはいかない。しかし従来は1人にやらせてしまう雰囲気があった。当社では、司書を孤立させない仕組み、しっかりと仕事を平準化する仕組みを構築した」と谷口社長は説明する。

図書館の運営には、選書リストをはじめ、さまざまなデータベースが必要で、当然ながらそれらをすべて個人で考えて、探すことはできない。しかし従来はオペレーションの仕組みがまったくなく、司書に丸投げする傾向があった。

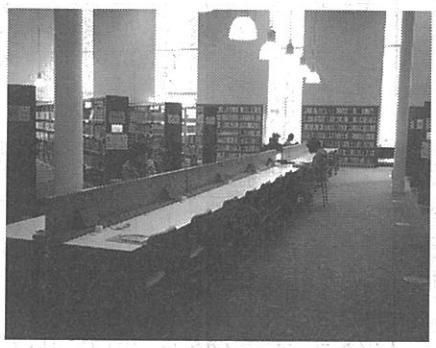
「仕組みがなければ、どんな優秀な司書でも限界がある。そこを何とかしようということで、新たな仕組みをつくっていった」（谷口社長）。

1人では把握できないデータをバックボーンのデータベースから持ってくることで、作業に時間をかけないようにし、人と人のコミュニケーションに多くの時間を取れるようにした。それがサービスレベルの向上につながり、コストパフォーマンスを高くしていった。

「いまでは、業務管理システムを通して、スタッフの状況などもインターネット経由で確認できる。システムの肝は、ICTにすべて頼るのではなく、人が関わるところはしっかり関わっていくことだと考えている」と谷口社長は話す。



まんのう町立図書館



館内。センタテーブルが特徴的